

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	18 / 2005 / 19-27
タイトル	少年時代の自然環境(2)
著 者 名	五十嵐正俊

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

少年時代の自然環境 (2)

第3代 五十嵐 正俊

まえがき

前号では出生地の北金沢町とドン山界限について書きましたが、小学校高学年になるにつれて行動半径も広がり、久須志神社方面、浪館・三内などの丘陵地帯、沖館川付近などにも関心が広がっていました。

いっぽう、小学校3年生の12月8日、空ツ風の強い日でしたがラジオから真珠湾攻撃の臨時ニュースが流れて「大東亜戦争」がはじまった事を聞かされていました。

連日のように聞かされる「大本営発表」なるデマ情報と国民学校教育によって子供も大人も洗脳されていくのでした。

それでも虫捕りや魚採りへの関心は変わらず、兄達のお供、あるいは近所の子供を誘っての川や山行き(浪館)でした。

久須志神社―一本松界限

境内には柵で囲った大きな銀杏の木、ポプラなどがあり、夏になれば「アブラゼミ」が鳴き



出すのです。夕方、見様見まねで「セミ」の幼虫採りを試みるのですが、結局一度も採れた事はありませんでした。むしろポプラの幹には真っ白で足の赤い大きな蛾がいてあまり気持ちが悪くなかったのです。

この白い蛾は「シロヒトリ」であることは研究生活に入ってから知ったのですが、いかにも毒蛾(「ドクガ科」ではなく「ヒトリガ科」)らしく触った事はありませんでした。

ポプラの木は学校の校庭にも旧線路通りに面して5~6本並んでいましたし、浪館通りの手前の「踏み切り」(現在なし)の近くにも4~5本ありました。何れもそのポプラの下にはセミの幼虫が出た穴があちらこちらに開いていたのですが「シロヒトリ」のせいで敬遠していたのでしょう。



ヒトリガ (東奥日報「あおもり昆虫記」より)

久須志神社の向かい側には製縄工場があつて、稲藁が次々に縄に加工されていく機械に見入っていたものです。この製縄工場の横を入りますと数枚の苗代があつて、田植えが終われば水を張った苗代は浅い池の様でした。7月になりますと「赤とんぼ＝大部分はアキアカネ」が続々と羽化してきます。この空になった苗代でもたくさんのヤゴが採れるのでこの苗代もヤゴ採りの漁場の一つでした。



アキアカネ

浪館通りは久須志神社付近で折れ曲がって真っ直ぐ浪館の集落へ向かって田んぼの中の1本道(現在浪館通り商店街)になって途中(今の古川中学校付近)に橋があつて細い松ノ木(アカマツ)が立っていました。我々はこれを「一本松」、その上流にある大きな「クロマツ」を二本松と呼んでいました。一本松の橋の付近で川の水は3本に分流されていたと思います。それぞれの護岸は川の砂を詰めた俵で構築されていました。流れが分流される手前は子供らのちょっとした水浴場に利用されていました。水泳の出来ないわが兄弟はここでもヤゴ採りやナマズ採りでした。

ここでは護岸に使われた俵の間を丹念に見て歩くとヤンマのヤゴが採れたのですが、水田地帯の流水の中に棲息するヤンマのヤゴが何という種であつたか未だに思い出せません。ただ記憶の中に「カトリヤンマ」という名前だけが残っていますので「カトリヤンマ?」だったのかもしれません(現在、平野部の流水系に棲息するヤンマ類は絶滅しています)。

一本松の橋から川添いの農道を数百m 遡ると変電所(現在も存在)があつてその構内に四角い板で護岸した調整池?がありました。水は澄んでいて「ギンヤンマ」が飛んでいたような気がします。ここで採ったのか何処で採ったのか知りませんが、ある日、1頭だけ兄が「ギンヤンマ」のヤゴを採ってきて深夜眠い目をこすりながら羽化の瞬間を待った記憶があります。羽化寸前のヤゴは既にヤゴの殻を通してギンヤンマ特有の色彩が見えていました。当時、父が花器の販売を始めていたのでヒバ材で組んだ棚があり、その棚の足の部分に登らせたヤゴは夜更けと共に定位して動かなくなっていました。

多分時間は夜の12時を回っていた深夜だったと思います。固唾を呑んで待っている目の前で翅芽が左右に開かれ羽化の脱皮がはじまったのです。二度、三度背を



現在の『一本松』周辺。当時我々はこのクロマツを「二本松」と呼んでいた。



ギンヤンマの羽化

盛り上げるような力が加わり、その都度ヤゴの翅芽は左右に開かれ、何度目かの力みが入った瞬間、左右の翅芽の間から薄緑色の光がほとばしった様でした。

その光点は見ると見る限り、あのギンヤンマ特有の薄緑色の胸部が現れ、気が付けば既にヤゴの頭部にも亀裂が走り、ヤンマの頭部が現れる。次いで6本の脚が次々に抜け、トンボの体は次第に後ろにひっくり返るように垂れ下がっていく。6本の脚が全て抜け、宙を指していた脚が折りたたまれて休止期に入る。この間、10分程度だったでしょうか？

「シオカラトンボ」や「アキアカネ」の羽化は何度か見ていましたが「ギンヤンマ」の羽化はとくに美しく鮮明な印象が残っています。この時の印象が忘れられず、定年退職後もトンボ類のヤゴを求めて歩き回っているのです。

数年前から始めたホームページ (<http://www.jomon.ne.jp/~igamasa/>)でもしばしば紹介していますが、その中でもトンボのヤゴが水中から陸上の生活へと切り替わる羽化・脱皮のシーンは非常にドラマチックな場面ではないかと場合によっては深夜でもカメラのレンズを向けています。

二本松近辺

一本松から川に沿って上流に行きますと少し大きなクロマツの木があつて、この付近の平野部では唯一の日陰を作っていました。木の下は農家の人たちの休息場所になっていたらしく、少し踏み固められた草原でした。久須志神社付近で分かれて変電所前を通る道はこの

二本松のところで橋を渡り、浪館集落の手前で一本松を通る直線道路に繋がっていました(現在の道路もほぼ同じ)。

現在、西滝川は盲学校付近で万太郎堰と分岐して流れていますが、当時の川の流れとは

異なっている様に思います。

二本松付近の流れは深い淵もあり、子供の目には危険な場所で、二本松から少し下流側に用水路がヒバの樋で本流と交差している場所がありました。

この樋には上流から流れてきた枯れたアシなどの破片が引っかかってこのゴミの下には大物の魚が潜んでいそうな気配を感じました。

このゴミを見つめていますとなにやら動く気配があり、よく見ますとそれは大きなカニ(モクズガニ)でした。この付近の分流された用水路の岸寄りには楕円形の横穴が見られ、手を入れて見ますとモクズガニだったり、カニの穴に逃げ込んだナマズだったり、素手が専門の私もでも獲物を捕らえることが出来たのでした。

川岸の土手には黄色のやや大きい花の咲く月見草(オオマツヨイグサ)、ピンク色のカワラナデシコの花が咲いていたのが記憶に残っています。

この頃、時々誘い出しては一緒に行動していた隣家の Y 君がいました。ある時、Y 君がこの樋から足を踏み外して川に落ちてしまったのです。幸い周りの木に捕まって無事でしたが子供の背丈を超える深さがあったようでした(その日、Y 君は養母に叱られるのが怖くて家に入らずに家の陰で隠れていたようです)。

後日、夕方近くこの付近で野生のカモ(多分カルガモでしょう)の飛ぶのを見ました。今では最も普通に見られるカルガモだったと思いますが当時は野生のカモを見たのは初めてで非常に珍しく感じたものです。

浪館・三内の採草地

久須志神社から浪館の集落まで当時はほとんど真っ直ぐな砂利道が続き、周りには水田が広がっているだけで何一つ日陰はありませんでした。真夏の太陽を浴びながら小学生が帽子もかぶらずに下駄履きのままで約 2km の道のりを歩き通すのはちょっとした冒険でした。集落の入り口には 1 軒の商店(手塚商店:現在もあります)がありました。しかし、小遣い銭も持たずに歩くのですから「ラムネ」や「サイダー」など飲み歩く習慣もなく、山の湧水のある所に到達するまで喉はカラカラです。結局、農家の井戸水を頂戴して歩くのでした。深い井戸から釣瓶で汲み上げる井戸水は冷たく大変美味しかった。

集落を過ぎると道の両側に「ウルシ」を掻き採っているウルシのトンネルを通るのですが、私は全く平気なのに隣の Y 君はその場所を通過しただけで酷いウルシ被れになり、学校を一週間ほど休まなければならなかったのです。

やがて道は赤土むき出しの坂道(現在の



アカエゾゼミ (東奥日報「あおり昆虫記」より)

慈恵会病院の横)を上りきると斜面の南側には採草地が広がっていて、尾根の上の道は三内に繋がっていました(慈恵会病院の後を通過して三内丸山遺跡に通じる道)。採草地の手前で斜面の下方に分岐した道は二股方面に繋がっていたようです。尾根道の北斜面は林になっていて、細い「アカマツ」の林(安田の県営陸上競技場の南)でした。まだ朝露が残っている時間帯ですと子供の足でけつ飛ばしても「ギギツ」と悲鳴を上げて「アカエゾゼミ」が落ちてきたりするのです。

採草地になっている南向きの斜面では「チヨン ギーツ」と長閑な「キリギリス」の鳴き声も聞こえてきます。



キリギリス

はるばるこの浪館の採草地にやってくる目的には兄弟同士の場合は「キリギリス」採り、近所の N 君を誘うときは斜面の下(現在の環状バイパス)にあった大きな「グミ」の株が目当てでした。「ナツグミ」ですので同じ頃、「ヤマグワ」の実も黒く熟すのでした。赤く熟したグミの実を食べたり、クワの実を摘んで唇を紫色に染めたりしながら初夏の日差しを一杯に浴

びて過ごすのでした。

キリギリスは鳴き声からおおよその位置の見当を付けます。採草地のシバ斜面には所々「バッコヤナギ」の株(時々刈られるので丈の低い萌芽株)やススキの株が点在しています。「キリギリス」はこれらの株のなかで鳴いていることが多く、比較的簡単に鳴いている株を特定することが出来ます。しかし、鳴き声の悪い(赤い「ネジレバネ」?の寄生によって発音不良)個体もいるのでそれらを聞き分けながら狙う個体を決めるのです。狙いが定まったら後は風下から接近していきます。近くまで行ったら鳴き声に合わせて 1 歩ずつ抜き足差し足で進みます。首尾良く接近出来たときは鳴いている♂の存在を確認出来るまで観察しますが、どうしても虫体を確認できない場合は「トン」と足を踏みならします。

すると、何処かの葉が揺れて「キリギリス」は真下に落下して隠れるのです。直ちにその場所をかき分けると「頭隠して……」の諺通り、頭を株の根っこに突っ込んだ状態の「キリギリス」が発見できます。虫を潰さないように、噛まれないように素手で捕らえれば良いのです。100%この方法で成功するわけではありません。熟練の度合いによって捕獲率に差が出ます。それでも高校生になった頃には盛岡の岩手大学(当時はまだ高等農林?)で行われた「日本動物学会東北支部第 3 回大会」の参加(聞いただけ)の旅費の一部を捻出するため、「キリギリス」を捕まえてバイト料を稼いだ(夜店通りの店に持って行って買って貰った)こともありました。

当時、このような採草地は各地に存在していたのでした。その多くは度重なる草刈りによっ

て、実状は「ノシバ」のなだらかな原っぱとなっていましたので遠足(当時はすべて学校から歩いていったのです)の適地にもなっていました。

シバ草原特有の春は「アズマギク」「オキナグサ」秋には「センブリ」などごく普通にみられたものでした。しかし、近年、農業の機械化とともに採草地の必要性が無くなりかつてのシバ草原は消滅してそれと同時にこれらの植物の他、おおくの動植物が影響を受けています(沖館川遊水池の土手を定期的に苅り払いすればシバ草地を再現出来そう)。

浪館・三内に採草地があった頃、記憶に残っているのは「コカマキリ」「カヤコオロギ」「ホシササキリ」「キリギリス」「ヒメシロチョウ」「ギンイチモンジセセリ」などが普通に見られたのです。

そして、この丘陵地帯まで上ってくると喉の渇きを覚えますので沢目の湧水を求めて斜面を下ることになります。手の平で掬ったり、フキやササの葉を丸めて1~2杯沢水を掬って喉の渇きを癒してから、枯れた草などを取り除きかき回して濁りを作ります。程なく上流から澄んだ水が流れ下って濁りが収まると、下流からぞろぞろと「ニホンザリガニ」が現れるのでした。これが我々の「ザリガニ採り」の流儀でした。「ザリガニ」は甘く味付けして食べるのですが真っ赤に仕上がった「ザリガニ」は薬(肺病=肺結核)だと称して入手でき次第食べる習慣があったようです。



ザリガニ

「ザリガニ」と同時に大きな不気味なヤゴが棲んでいました。しかし、これが「オニヤンマ」のヤゴであることは中学生になってから知ったのでした。

「ザリガニ」採りに夢中になっていると、突然、空の上から「ジープ、ジープ」と聞こえたかと思うと「ガッガッガッ、ザアー」けたたましい羽音が急降下で聞こえてきます。「オオジシギ」です。一名「カミナリシギ」と呼ばれるずんぐりした「シギ」の仲間でシバ草原を繁殖場所にする鳥です。人間に危害を加える訳ではないのですが、かなり恐ろしい音でビックリさせられたものです。

朝、この採草地に向かって登ってきますと、農家の切れる辺りから道の両側は土手が築かれ畑の作物は直接見えませんが、土手には「カラスウリ」や「クズ」が一面に繁茂していました。この付近から道路の両側で葉っぱの上で休息している「アオギス」(=ヤブキリ)が見つかるのでした。夜通し(ヤブ



オニヤンマ (ヤゴの顔)

キリは夜の虫)鳴いて疲れているのか眠っているのか動作が緩慢で素手で簡単に捕獲できるのでした。その他、「カマキリ」がいたり「マイマイ」(大型のカタツムリ)が葉裏にくっついていたりで目が離せない場所でした。季節によって違いますが午後になりますと「カンタン」が鳴き出します。カンタンは虫に食われて開いた穴から外を覗きながら鳴く習性があります。青森の郊外ではごく普通の鳴く虫ですが、関東関西では高山に行かなければその美声を鑑賞出来ないそうです。

美声の持ち主と言えば「スズムシ」が有名で、天然分布していない青森でも毎年人工飼育



カンタン

を繰り返している方がおります。「カンタン」見かけは黄白色でスマートな虫体なのですが食性は「アブラムシ」などを食べる肉食昆虫です。また、あまりにもポピュラーな存在のため観賞用に飼育することはありませんが、「エンマコオロギ」の鳴き声も素晴らしいと思っています。

また、若葉の頃全山一斉に鳴き出す「エゾハルゼミ」も大好きな一種です。

砂浜が広がっていた沖館―新田海岸

少年時代、我が家では海岸とか大きな川へ遊びに行くことはタブーだったので浪館・三内の採草地に比べればほんの数回行っただけです。

それでも沖館川河口の両側から新田川(新城川)河口東側にかけては砂浜が広がっていて、夏になれば海水浴客で賑わっておりました。

当時は営林局(現森林博物館:玄関左側の事務室は元営林局庶務課文書係の部屋で、私の初任地でした。現在の建物は前の部分半分だけが博物館として残っています)の裏側には水中貯木場(秋田木材会社)があり、水中貯木場の海側の所まで鉄道の引込み線が来ていました。引込み線の付近には見事なヒバの丸太が山のように積まれていました。「砂浜」と呼ばれていたのはこの鉄道引込み線から海に下った所で、鉄道連絡船用のドック(ベブリッジの下にその跡が残っています)と沖館川河口の間に砂浜(現在は埋め立てられて石油タンクが林立しています)があったのです。

この付近は沖館川の河口と共に海水浴客と釣り人で休日は大変な賑わいでした。記憶に残っている生き物と言えば「アミ」です。水泳も魚釣りも出来ない子供が波打ち際で最初に触れる生き物だったのでしょう。波打ち際の海水を手ぬぐいで掬うと小さいエビに似た「アミ」(アミは佃煮に加工されている)が採れました。また、泳ぎの出来た子供は沖の方に行って「もつぷ」(＝ツメタガイ:アサリ、ハマグリなど二枚貝に穴を開けて捕食する天敵の巻き貝)や「カ

シパン」と呼ばれる平べったいウニの仲間がいました。

これらの動物は子供の背丈がやっと届くくらいの砂底に棲んでいて足で探って採るのでした。「ツメタガイ」は泳げない私でも一度だけ丸い石のような触感が足の裏から感じられ手にしたことがありました。

焼いて食べたらしいのですが、砂が多いのが欠点だそうでどんな味だったのか思い出せません。沖館川の河口から海に延びた自然石の防潮堤?があり、その一部が崩れていました。この崩れた石の下には「アサリ」が潜んでいて干潮時にはアサリを採って「あさり汁」を賞味したことがありました。砂抜きが不十分だったので汁椀の底に砂がたまっていた記憶があるのですが、豆腐を入れた吸い物の出し汁はなかなかの美味でした(後に林業試験場の寮で東京湾のアサリ汁をしばしば食べさせられましたが、油臭くて不味かった)。

この石垣の防潮堤では「モクズガニ」「イソガニ」「フナムシ」「カキ」「ハゼ」「ドロメ」「ボラ」(稚魚)などいろいろな生き物たちが観察できました。

また、沖館川では橋の上から鉄の輪っばに目の粗い漁網を張った上に魚の頭を括り付けただけの仕掛けで、面白いように大きな「モクズガニ」が捕れるのでした。石垣の間には「ウナギ」も隠れていて「ウナギ」をねらう人、「ハゼ」を専門にねらう人など釣り人



モクズガニ

や、それを眺める人など 11 月には 40~50cm のボラの大群が現れ、首尾よくヒットさせても当時の竹竿では竿をへし折られる人が続出していました。

水中貯木場の中には 5cm ほどにもなる「スジエビ」?が棲んでいて海釣り用の餌に採っている人もいましたし、中学生の頃、コイの稚魚の大群が現れ鈴木二好君と鯉釣りに行ったこともありました。

最近の沖館川は全国的にも有数のドブ川になっていますが、現在でも意外に色々な生き物が見られます(<http://tonbo6shi.cool.ne.jp/okitategawa.html> 参照)。

沖館川から西の方へ行きますと当時「無線の浜」と呼んでいた人家のほとんど無い砂浜があり、陸地部分には「ハマナス」が繁茂しアシなども生えていたようです。汀線近くの海中には「アマモ」の群落があつて、波打ち際には枯れてちぎれた「あまも」がたいせきしていました。このアマモの中にチョット変わった生き物がいました。その形は「タツノオトシゴ」を引き延ばしたようなあまり泳ぎの得意でない動物でした。のちにこの不思議な形をした動物は「ヨウジウオ」という魚類であることを知ったのは叔父の家で動物図鑑を見てからでした。体長は 20cm 程度、太さは直径 1cm 位だったと記憶しています。

この他、体長 1~2cm の小さな赤い縞がある「クラゲ」もありました。

陸上では「アシ原」に深い穴を掘って生活する「アシハラガニ」が海岸一帯に棲んでいたのです。しかし、残念ながら近年このカニは見られなくなったようです。

むすび

主としてまだ小学生(国民学校生)だった頃体験した「身の回りの思い出」をいろいろ綴ってみました。ごく当たり前だった当時の環境も約 60 年経った現在、振り返ってみますと里山から平野部にかけて自然環境は激変してしまったことに驚きます。

歩いて行動するのが当たり前だった生活が、チョッと朝のゴミ出しだけでも車を利用したり、全て手作業だった田植えも稲刈りもほとんど機械化されています。

気が付いてみますと、水田地帯の水路がほとんどコンクリートで護岸されて子供の頃遊んだ田んぼの小川は消えてしまっています。

平成 11 年 2 月 18 日当時の環境庁(現:環境省)が「メダカ」を絶滅危惧種第Ⅱ類に指定した大変ショッキングなニュースに象徴されるように、高速化、効率化、利便性、快適さを追求するあまり人類は自然を支配できると思いがっているのではないのでしょうか？

野生の動・植物は人類が発明した農薬やコンクリートに対してどんな反応をしたのでしょうか？たくさんの生き物たちがその住処を失い、その毒性に耐えきれず、私たちの視界から消えて行った様に思われます。この激変ぶりは半世紀にも満たない数十年間の出来事だった様に思います。

最近「自然再生推進法」(<http://www.env.go.jp/nature/saisei/law-saisei/>)という法律が施行(平成 15 年 1 月 1 日)されたのですが予算の裏付けのない法律といわれ、厳しい財政事情を抱える地方自治体がこの法を楯に自然の再生・復元工事の実行に取り組むのは何時になるのでしょうか？住民全体の世論がなければ実現の見通しはないでしょう。

かつて青森県の知事だった K 氏は知事在任中に油川から平舘まで陸奥湾の沿岸をコンクリートで固めた事を自慢しているようですが、陸奥湾沿岸の生き物たちの棲息環境が激変してしまったようです。沿岸漁村の方々にとってはたして豊かな海になったのでしょうか？

政治家は自然環境を破壊して人類の自然征服が成果だと宣伝しています。しかし、これはとんでも無い暴挙ではなかったのでしょうか？海岸の一部には人工的な砂浜はあるかも知れませんが。また、河川の中には親水公園なども造られます。生き物のほとんど居なくなった砂浜で「芋の子」を洗うような海水浴場、ただ、足を浸し手を洗う程度の親水公園、効率的に水を流すだけの農業用水路、車窓から眺めるだけの観光地、朝起きてから夜寝るまで一度も土の上を歩かないコンクリートジャングルでの生活、アリの様にぞろぞろ群れを作って穴から穴へ移動する都市生活。これが私ども現代人が後世に残さなければならない人類の棲息環境なのでしょうか？ (完)